



No.1577

100番

——アフリカの農業機械化の経緯について。

山口 アフリカには54国ありますが、ひと口に農業機械化といっても、地域によって、慣習によっても進捗が異なるんです。共同作業を行う慣習があるかないかで、機械の共同利用がどのくらいかとも変わってきます。また、欧州各国の植民地であった国々ではサイマル麻やサトウキビなどを大規模生産・加工するために欧州資本で農業機械や工場がどんどん入って来て、そうした国々では機械の利用が日本よりも早かったかもしれません。その後は1960年代に独立が進み、各国がそれぞれの国で機械化を進めていく形になりました。

例えばタンザニアでは、主に中国が支援を行い、政府が国内各地の国营農場にオペレーターを派遣してトラクタの耕耘整備作業を行う方式が90年代前半まで続いていました。70・80年代には6000台の水稲作地帯が国営化されていましたが、その後は民間化した流れになっています。

——アフリカの農業機械化が進んだのは2010年代に入ってからですか。

米の機械化進むアフリカ

アフリカの農業機械化事情

食生活の姿容により、米消費が増え続けているアフリカ。日本政府はアフリカの米増産を支援すべく、JICA(独立行政法人国際協力機構)を通して、ササハラ・アフリカの米の生産を倍増させることを目標とした国際ニシアティブ(CARD)のアフリカ補作振興のための共同体、事業や、アフリカ諸国における先進農業技術の導入促進を官民連携で実施するAFICAT(日・アフリカ農業イノベーションセンター)事業を進めている。こうした支援を受けて、アフリカの農業機械化はどのように進み、現状はどんな状況にあるのか。主にJICA事業を通してタンザニアの機械化に約30年携わり、アフリカの農業機械化に精通する山口浩司氏(兼かいはつマネジメント・コンサルタンツ・コンサルタント、NPO法人IFPAT(主研究員)に最新事情を伺った。

山口 そうですね。2016年にタンザニアに行った際にはトラクタや耕す機、コンバインが普及し、稲米所が

あちこちでできていて、非常に驚きました。普及の仕方としては、個々の農家が導入が進んだという

と言われる広い農地を持っていて、農業経営者人たちが、土壌改良や運送費を稼いだ資金を農業にまわして、人を雇って

って機械化が進んでいる背景として農村社会の高齢化、若者の離農があります。これは世界共通の傾向ですが、農村で高齢化が進み、田植えや収穫作業時の人手不足が深刻化して、人件費が高騰している。今も全戸より機械化して作業してもらう方が安くも

なポイントになっています。ただ、実際には農地の整備がなかなか進まねばならず、米が作られているけれども機械が入れない地域というの

も多し。さらに気象条件にも

08年にCARDが設立される前から米を増産してしまっただけで、お米は野原のまじりに残す、乾燥保存もできず、タンザニアの農業者は90年代から、作った米を親のままで貯蔵し、精米した状態で備蓄して、高く販売してしまっています。さらにJICAの支援によって、栽培密度や直線植え、水管理などの日本栽培技術が普及され、キリマンジャロ州から全国に広まっていったのです。このように日本政府の支援により、タンザニアの稲作単収は飛躍

農地整備、低利融資が課題



兼かいはつマネジメント・コンサルティング
コンサルタント 山口 浩司氏

タンザニア 精米流通で米作発展

のが進んでいます。共同利用だと担い手の数を保ちつつ、全戸の食糧を得るのが難しいです。やはり1戸1

トラクタやコンバインを活用するというのが機械化が進んでいる実態になります。

左記される問題もあります。タンザニアの稲作はどのように伸びたのですか。山口 タンザニアでは20

的に伸び、ほぼ全量が売れていました。

実は、世界の米売値はアフリカをはじめとして、多くの地域で順調な状態で農産品販売しているんです。日本のように(タンザニアも)評価されていない。タンザニアも元々穀物で西アフリカでできたこと

によって、農家もそこで精米して販売するようになった。白米にして品質が見える化したことで正しく評価され、高く売れるようになった。農家自身も作った米を官能的に評価し、さらに高く売りたいという考えが芽生え始めた。栽培体系を見直し、収穫や乾燥の仕方を改善し、小さな農家もどんどん儲けられるようになった。利益が出た時にさらに農業投資につき込むようになった。土地を買い集めて農地を拡大し、人手が足りない分を農業機械を導入して、自分の農作業が終わったら近隣の村の農作業

を助け負って儲けていく。温暖な気候なので稲作が2回でき、あとという間に投資の元が取れるという循環です。

——農業機械化の課題についてはどうですか。

山口 機械化は促進するものではなく、農業現場で必然のものになっていきます。もう少し農地が整備されれば機械を使いたい人が大勢いるので、機械化の需要は非常に大きいです。問題なく進んでいくと思います。ただ、それが実際に広がるための課題としては、①圃場で機械を使うための農地整備と、②低金利の農村融資があげられ、これが両輪で進むことが重要だと感じます。その進捗スピードは各地でバラバラですが、先ほど話したタンザニアをはじめ、セネガルやカーナなども機械化が進んでいます。

一方、日本ではアフリカのイメージが古いままです。米を作って食べていることや、農業機械化が進んでいることや自国を知らない人も多く、これも一つの課題ともいえるでしょう。

世界の国が約200カ国あるうち、アフリカは4分の1強を占め、さらに人口増加が最も多い大陸です。伝統であったヒエやアワ中心の食生活から、米国大陸が入ったジャガイモ、ジャガイモ、トウモロコシを食べるようになって、今は米を大に食べるようになって、その多くを輸入している。ほとんどの国が米輸入に依存している、今のところCARD32カ国のうち米を輸出しているのはタンザニアだけです。タンザニアはアフリカ米生産の先頭を走っている国で、6000万人強の人口がいて、年間1人当たり約35・40kgの米を食べてお

り、余剰分を近隣のケニア、ウガンダ、ルワンダ、ザンビアなどに輸出しています。そのため、アフリカ地域の米の需要を増産、機械化のポテンシャルは大にある。これについては、更なる情報発信が必要だと思っています。

通と精米流通の問題もあります。タンザニアは比較的早くから農村部に小さな精米所が多くあったので、農家が精米流通を行い、売値時の価格交渉や生産改善につながったもの、国によっては、精米所の設置に政府許可がいる場合もあり、そうした国では精米所がなかなか増えない。そうなる農家は初めしか販売できず、品質が分からないまま不利な条件で流通されるため、農家もあまり儲けられないままです。農家も上らない。そうした政治的問題も絡んでいると思います。

最後に、アフリカ進出を検討する日本の農機企業へアドバイス。

山口 我がができることとしては、アフリカの農業現場について、現在の状況や課題、可能性などをしっかりと調査して、必要かつ適切な情報を届けることだと思っています。少しずつ実施しています。

あとはやはり、現地に足を運ぶことが重要だと思います。現地政府の要人から「中国やインドのように、日本企業もどんどん営業に来るべきだ」という声が出ています。ただ、そうした際にいきなり現地政府にコンタクトをとるのが難しいので、現地政府の人を紹介することもできるの、ぜひ活用していただきたいと思っています。

——無難すぎないですか。

山口 そうですね。